

近世初期俳書年表稿 (一)

— 寛文元年 ~ 同四年 —

米 谷 巖

寛文元年 (辛丑・一六六一)

No.	書名	冊書 数型	編著者	序・跋・刊記	備考
35-1	(自序) 奉納集 (目錄題・内題) 天神奉納集	中二 (上・下)	紀伊國和歌山 住 黒田元上(編)	自序・「萬治三稔仲秋下旬」 刊 ・「萬治四年正月吉日」 ・中野小左衛門板行	注、浦天満天神に祈願のため編んだ紀州俳人(百六十)の四季類題別発句集。上卷四十六丁、下卷四十四丁。 ○わ35-1 (中二) 12 (中影写二)
35-2	(目錄題・内題) 水車軌	横四 (一・四)	中嶋勝直(編)	注、西武初め諸家(百十七人)の四季類題別発句集。第一卷(春)三十三丁、二卷(夏)二十五丁。秋・冬の両卷、伝本未詳。『渡奉公』、阿誰軒編『誹諧書籍目録』には「水車 六冊 随流作」とある。「六冊」は「紙屋川水車集」(二冊)を含む冊数か。 ○わ26-1 (横欠一、春・横影写欠一、夏)、柿衛(横欠一、夏)、学習院大(写欠一、夏)、藤園(版欠一、夏)	注、万治三年中に制作の独吟廻文千句に師西武の合点を得たもの。追加百韻、諸家祝儀の挨拶発句(四十八)

○ミズグルマガイ

○テンジウホウノウシユ
俳諧大興

35—6	35—5	35—4	35—3
糸瓜草 (跋文) 絲瓜草集	(渡阿) 思出草 (広故) 思出草 (尾題) 思出草	(仮題) (元日の記・十八番) (草木自句合等)	(序) 紙屋川の水車 (各巻巻頭) 誹諧廻文千句水車集 紙屋川水車集 紙屋川水車
六卷 中六 (春上・冬)	大六 (二六)	巻写一 (自筆)	横二 (上・下)
山城国伏見住 高野瀬 専庵道甘(編)	江戸 蝶々子(編)	立圃(著)	中嶋氏源左衛 門勝直(著)
自序・(目付欠) 同邑散人佐久間見純跋 (漢)・寛文初稗七月穀 日 ・中野五郎左衛門板 行	(渡阿)・寛文元年丑(ノ) 五月下旬	奥・「寛文元年三月日」	自序・「寛文元年二月廿 五日」 無外軒西武跋・(目付欠) 京・菱屋次郎兵衛開板
注、伏見俳人を中心とする諸家の四季類題別発句集。 句引に合計数を欠くが、千八百九句、二百廿九人余。 春上廿五丁、春下廿三丁、夏上十五丁、夏下十六丁 (夏部、合一冊本あり)、秋廿八丁、冬廿丁。 ○わ35-10(中五)、酒竹三三四八(中欠五)、頼原(版 本写五)、国会・宮城(伊達)(各版六)	注、四季類題別諸家発句(・付句)集。冊数・編者・年 記は、(渡阿)・(広)・(故)等の古俳書目録による。但し『故 人俳書目録』のみは冊数を五冊とする。寛文元年板、 伝本未詳。第二卷二十八丁(但し巻初六丁脱)零本の み伝存。 ○頼原(版欠一、巻二)	注、俳文・句合など。(一)「元日」と題し、発句「門松 や千載集のわかみとり」を含む俳文、(二)「十八番草木 之句合」、(三)備後への「旅の記」、(四)「東山花見之記」、 (五)廻文和歌他より成る。 ○福山市、服部政喜氏(巻写一、自筆)	句)、千句と同題の廻文和歌十首、および『水車軌』(四 冊)のものともみられる句引(二千百廿一句、百十七人) と、更に諸家発句(四八句)を付す。他に無刊記本があ り、柳亭種彦俳書文庫(天保3成)によれば、本集(廻 文集紙屋川水車)のみを単行した寛文四年板もある。 ○わ35-7(横二、菱屋板)・9(横影写合一、無刊記 板)・8(横影写欠一、上巻)、国会(版一、「俳諧廻文 千句水車集」)
○へチマグサ	×	×	○ミズグルマシユウ

35—10	35 — 9	35— 8	35— 7
入り り む む こ 集 集 下 上	鳥 帽 子 箱 (序文・目録題・内題)	弁 説 集 (目録題・内題)	(仮題) (俳 諧 漢 和)
(中 上・下)	四 卷 中 二 (上・下)	中 五 (二~五)	横写 一
喜多村休斎 立以(編)	喜多村休斎 立以(編)	片桐良保(編)	毎延等(著)
自跋・(日付欠)	立圃序・「世にひろから ん文のはしめの年 冬の中比愚筆をそ ふる事になん」 自跋・(日付欠)	(渡)阿・寛文元年九月中 句 (故)・寛文元	
注、発句集『烏帽子箱』(二冊)の付句篇(五十七人、 九百五句)。「烏帽子箱」立圃序に「なを付句のおもひ 入あるさま」をも新座のわかう人にしらしめんとて	注、自跋によれば、立圃が企画したもののこの年春帰 京のため、師命により引継いで編んだもの。立圃門の大 坂俳人を中心とする諸家の四季類題別発句集。巻末の 名寄によれば「作者二百六十人」。総句数を欠くが、千 三百一十句。上卷(春・夏部)七十二丁、下卷(秋・冬部) 五十九丁。立圃序文に「上下、二まきに書しるし、愚老 に名を付よといへり」とあるが、(渡)阿・故は「四冊」 とする。付句集『入聲集』(二冊)を含む冊数か。 ○わ35—5(中二)4(中欠一、卷一・二)6(中影写 欠一、卷一・二)、頼原(版本写二)、宮城伊達(版二)	注、四季類題別諸家発句集。冊数・編者・年記は、 (渡)阿(広)故による。最終巻(第五巻)は付句集と句 引か。伝本、第三巻秋部(二十六丁)のみ。 ○中村俊定氏(中欠一、卷三)、わ35—11(半影写欠、 卷三)、頼原・学習院大(各版本写欠一、卷三)	注、俳諧聯句・漢和俳諧の百韻四巻収録。その内に 「承応貳稔九月吉日」と「寛文元年八月八日」興行の 漢和を含む。天理本、墨付二十丁半。巻末に「熱田社 僧、円定坊正慶筆」とある。 ○わ35—3(横写一、毎延筆)
シュウ	○ エボシバコ	○ベンゼツシュウ	×

35-11	(内題) 入聲集			一巻くハへらる。(中略) 入聲と名付たり」とある。 下巻末の作者名寄(九丁)と自跋(二丁)は、『烏帽子箱』と同文で同板。上巻五十二丁、下巻五十三丁。 ○酒竹一四一(中二)、宮城 ^{伊達} (版二)	○イリムコ
(渡)阿 (広)故	浮世長刀	一	一興(著)	注、俳論書。(広)故に「氷室守返答」と注記。重頼の『毛吹草』(正保2)を論難した正章の『氷室守』(正保3)に対する反駁書とみられるが、伝本未詳。	×

寛文二年(壬寅・一六六一)

36-1	伊勢正直集 (序題) 神法楽伊勢正直集 (目錄題) 神法楽正直集 神法楽集 (内題) 伊勢正直集 (句引題) 正直集	中七 (一七)	如之(編)	自序「祝詞」・「ことし万治のつゐてふたとせのすゑの春、十といひて七つにあたるよき日(中略)神たちにたむけたまつる」云々 無名子跋(漢)・「萬治己亥歲」 刊・「寛文二年正月吉日」 ・中野市左衛門板行	注、伊勢山田の神官らを中心とする諸家の四季類題別発句集(一六巻)。句引によれば「発句数合参千一百餘句、作者五百九拾餘人」。第七冊は、句引・跋の後に、神官による慶長十五年興行の法楽万句の発句(百句)、及び享祿三年正月九日の荒木田守長独吟百韻を「追加」として収録。巻(一)三十九丁、(二)四十五丁、(三)五十三丁、(四)二十六丁、(五)二十八丁、(六)三十七丁、(七)四十一丁。 (複)荻野秀峰解題『伊勢正直集(上)(下)』△近世文学資料類従・古俳諧編42・43(昭和49・50刊) ○神宮(中七)、わ36(中欠一、卷二春下)、額原(版本享欠二、春上・秋上)、岡山市 ^{飛*} (享欠二、秋下・冬)	○イセシヨウジキシュウ
				注、いろは別付合語辞典。古来の名人の付合、先師貞		

36 — 4	36 — 3	36 — 2
<p>たひひ 枕 (序文・跋文) 旅 枕 (内題・道通跋題) 誹諧旅枕</p>	<p>玉櫛 笥 <small>初本結附録</small></p>	<p>初本ゆひはいかい付合 初もとゆひはいかい付合 (自序) はつ本結 (乗柳子跋文) 初 髻</p>
<p>中 三 (上・中・下)</p>	<p>中 一</p>	<p>中 七 (二七)</p>
<p>自謙子 村上令敬(編)</p>	<p>落葉堂 池田是誰(著)</p>	<p>池田氏は誰(編)</p>
<p>鶏冠井のよしとみ(令寛) 序・「ゆたかなる文はこ のふたとせはしめ に」云々 自序・「とらのとしに開 板に及ぶことしかり」 宇野道通跋(漢)・「寛文 二年仲春日」 京・山本七左衛門板行</p>	<p>刊・「寛文二年二月吉祥 日」 ・中野太良左衛門開板</p>	<p>自序・「萬治はしめの年、 萩の葉ミたるあき 風月ついたちこ ろ」云々 乗柳子跋・(日付欠) 巽氏令信跋(選)・「于時 寛文辛丑大呂上 浣」</p>
<p>注、いろは別名所(約二千箇所) 諸家発句集。各箇所 一句ずつ計一千四句。下巻末に、編者の師鶴冠井令徳 が毎句洛中の町名を賦した「町誹諧」独吟百韻一卷を 付す。上巻四十六丁、中巻四十一丁、下巻五十一丁。 (活)鳥津忠夫校『誹諧旅枕』△西日本同語国文学会翻 刻双書・一期5V(昭36刊) ○佐賀大小城(中三)、わ3617(中欠一、下巻「誹諧旅 枕町誹諧」)、京大(版欠一、中巻)</p>	<p>(活)俳諧文庫13俳諧論集(明32刊) ○国会(版一)、竹冷五一九(中一)、「落葉籠」</p>	<p>徳合点の点取の巻々等より収集して編成したもの(凡 例・乗柳子跋)。俳諧用語、及び名所約千七百語を掲 出、各々付合語を示す。卷(一)卅五丁、(二)廿六丁、(三)二 十丁、(四)廿五丁、(五)廿四丁、(六)廿九丁、(七)十四丁。 ○国会(版合四)、「俳諧初元結」、わ3616(中欠三、 卷二・六・七)、竹冷四三四(中合一、卷一七)、酒 竹三〇三四(中欠一、巻一)</p>
<p>○ タビマクラ</p>	<p>○ ハツモトユイ</p>	

36-7	36 - 6	36 - 5
<p>(仮題) (天神法楽・花見之記)</p>	<p>(渡)阿 (広)故 鹿 驚 集 (種) 鹿 驚 集</p>	<p>鄙 諺 集</p>
<p>卷写一 (自筆)</p>	<p>五</p>	<p>中(八)</p>
<p>立圃(著)</p>	<p>江戸 (井坂)春清(編)</p>	<p>荻野氏 安静(編)</p>
	<p>(渡)寛文二年 (阿)寛文二曆三月 (種)明曆三年印本 (故)明曆三</p>	<p>(渡)阿・寛文二曆(年) 三月 (故)・寛文二</p>
<p>注、巻頭「二月廿五日天神法楽」と前書する発句「飛梅やむかしの春にかへり花」、および東山花見の自他の句を中心とする句文。年記を欠くが、前書中に「大坂の立以多ほし箱といふ本を書たりとてもて来れるを」</p>	<p>注、四季類題別諸家発句・付句集か。年次について、古俳書目録類に明曆三年と寛文二年の両説がある。『詞林金玉集』(延宝7序)巻十六の引用俳書の配列順序、及び(種)の注記等から推して、前者を可とすべきかとみられるが、便宜当年にも掲出しておく。編者を(渡)春流、(阿)春院、(広)加友、(種)春澄と誤るが、『詞林金玉集』によれば、(故)の「春清」が正しい。(故)は春清編の『安山集』(冊数・年次不記)を別に掲出するが、(渡)に「安山子、此内也」と注し、(種)も「安山集といふも同本。別本と有るは誤也」とする。「鹿驚」と「安山子」(案山子)は同義であり、全五冊の内に題簽を「安(案)山(子)集」と表記した巻があるか。伝本未詳。</p>	<p>注、四季類題別諸家発句集(巻一〜六)。(渡)阿(広)によれば、全「八冊」。(故)には「八」とある(十巻八冊の意か)。第七・八冊は、付句集か。伝本、巻六(冬部)のみで、三十三丁の零本(季題「節分」の途中迄。以下「歳内立春」「雑冬」「歳暮」の諸句欠丁)。 ○頼原(版欠一、巻六)、わ3612(大ベン写欠一、巻六)</p>
×	×	○ ヒゲンシュウ

<p style="text-align: center;">36 — 9</p> <p style="text-align: center;">身の樂千句 (漢序) 身樂千句 (内題) 身樂十百韻</p> <p style="text-align: center;">横 一</p> <p style="text-align: center;">洛下之産 玄水丈人 元隣(編)</p> <p style="text-align: center;">山中正淑序(漢)・「寛文 壬寅孟夏下浣」 自序・「寛文二年正月日」</p> <p style="text-align: center;">注、連句集。元隣の春秋の独吟百韻六卷と追加の独吟 一卷、さらに一座した両吟二卷・四吟一卷の合せて百 韻十卷収録。全四十四丁。 正淑序文に「又作<small>ニ</small>為<small>ス</small>小式一篇而、以附<small>ニ</small>于後<small>ニ</small>」 云々とあり、(渡)阿も『身樂千句』につき「二冊、内 一冊仕様。」と注する。『はいかい仕やう』(俳諧小式) の自跋に、著作の目的について「やつかれ千の句をつ らねしも、今見れ(ハ)とこころく心よろしからさる 事のミ有。かつはミつからの不忘のそなへにかきなら へ侍し」とある。『はいかい仕やう』と併せて一部を なすか。</p> <p style="text-align: center;">○わ36—5(横) — 6(横影写一)、酒竹三六〇一(横 一)、竹冷三二(横一)、「身樂十百韻」、頼原(版本 写、二部)</p> <p style="text-align: center;">○ミノラクセンク</p>	<p style="text-align: center;">36—8</p> <p style="text-align: center;">はいかい仕やう (序題・序文) 俳諧小式 (凡例題・跋文) 小式</p> <p style="text-align: center;">横 一</p> <p style="text-align: center;">洛下六角堂 山岡元隣 玄水(編)</p> <p style="text-align: center;">求心子序(漢)・「寛文二 年歲次<small>ニ</small>壬寅<small>ニ</small>春 三月下浣」 凡例・自序・(日付、署 名欠) 自跋・「寛文二年初春日 述之」</p> <p style="text-align: center;">注、俳諧作法書。「第一、賦物之事」以下三十一項、 および「追加、書物題号之事」に分け、自他の句例を 挙げて懇切に説く。全六十丁。 ○わ36—2(横) — 13(横) — 3・4(各横影写一)、 「俳諧小式」、酒竹一四〇八・竹冷四五五(各横一)、 京大・早大・聖心女大(各版一)、学習院大(写一)</p> <p style="text-align: center;">○ハイカイショウシキ</p>	<p style="text-align: center;">云々とあり、寛文二年春か(雲英氏)。 (芭)雲英末雄「立圃筆『天神法楽・花見之記』につい て」(「会報・大阪俳文学会研究会」第17号・昭58・9) ○兵庫県、西尾精一氏(卷写一、自筆)</p>
---	--	---

<p>36—13 (渡)阿良保千句 (広)故千句</p>	<p>36—12 新板 毛吹草</p>	<p>36 — 11 俳集良材 (序文・目録・内題) 俳集良材</p>	<p>36 — 10 (序文) 誹諧雀の子 (目録題・内題) 雀子集</p>
<p>一</p>	<p>七卷 横五</p>	<p>中三 (上・中・下)</p>	<p>中六 (二・六)</p>
<p>(片桐氏) 良保(著)</p>	<p>松江重頼(編)</p>	<p>宮川奏亭子 政由(編)</p>	<p>銀竹軒 光方(編)</p>
<p>(渡)阿・寛文二年七月 (故)・寛文二</p>	<p>自序・(日付欠) 奥・「寛文二年夏五秋吉日」</p>	<p>盤斎序・「寛文二年初秋」 自序・(日付欠) 東京^{松山}切臨叟跋・「寛文壬寅季孟秋中澣」 京・谷岡七左衛門板行</p>	<p>自序・「干時林の鐘のはつかねつみのちよとはかりの発句をあつめ」云々、 奥・「寛文二季夏丙丁日記之」</p>
<p>注、連句集。(渡)阿に「子息筆」と注記する。伝本未詳。</p>	<p>注、俳諧作法・撰集。初版(正保2刊)以降、明暦元年板・万治二年板につづく後刷本。 ○わ36—14(横合一)</p>	<p>注、俳諧作法書。発句に詠まれた日本紀・つれづれ(草などの「古事・本説の良材」(序)を収集し、春・夏(上巻)・秋・冬(中巻)に分かって引用・解説、例句を挙げる。下巻は「四季部」(目録)として、花・郭公・月・雪を詠んだ貞門諸家の発句を収録。上巻二十二丁、中巻二十四丁、下巻二十九丁。 ○竹冷四三五(中三)、洒竹二七二五(中合一)、わ36—11(中欠二、上・下)、松宇(版欠一、中巻)</p>	<p>注、京都俳人を中心とする四季類題別諸家発句集(巻一〜五)。句引によれば、「句高合一千四百卅五句、作者人数貳百五十三人」。第六巻は「発句作者名寄」と、「発句切字事」以下三十三項目からなる作法心得を収載。巻(一)春上四十六丁、(二)春下三十八丁、(三)夏四十一丁、(四)秋四十七丁、(五)冬三十四丁、(六)二十七丁。 (複)雲英末雄解題『雀子集』△近世文学資料類従・古俳諧篇14V(昭47刊) ○早大(中六)、学習院大(中欠一、巻三)、わ36—10(中影写欠一、巻三)</p>
<p>×</p>	<p>○ケフキ グサ</p>	<p>○ ハイシュウリョウザイ</p>	<p>○ スズメコシュウ</p>

寛文三年(癸卯・一六六三)

36—14	(序文) 花の露 (目録題・内題) 露 (二・四)	道甘(編)	山友士序・(日付欠) (渡)阿・寛文二年仲冬日 (故)・寛文二	注、四季類題別諸家発句集『糸瓜草』(寛文一)の続集。(渡)阿(広)は四冊とするが、(故)は「五」冊とする。伝本、第一卷春部(四十七丁)のみ。	○ハナノツユ

37 — 2	(新撰抜粹抄續九)	半写一	盛陳(編)	自跋・(日付欠)	注、連句集。貞徳加點『正章千句』(追加)百韻を含む。正保4自跋、および明暦三年より寛文二年の間興行の巻(六卷)を含む季吟一座の両吟百韻八巻収録。その内、年記を欠く季吟・友光両吟二巻の内、「うす霞」一巻は、『季吟両吟集』(寛文4刊)に「寛文三年上巳」興行として収録。墨付百一丁半。	○わ36—11(半写一)	×
37 — 1	(自序中) 五條之百句 (内題) 星雪月花集	半一		自序・「千時寛文三天仲春に書終」	注、名句集・名家評。「貞徳老師常にほめ給ひし奇妙の句」(自序)ばかり、幽斎・守武ら百人の各一句(実数99句)を、「すゑく」の発句の「手本」として季題別に編む。巻末に貞徳および高弟十一人の作風評を付す。無署名であるが、『寛文十年書籍目録』に「正章(貞室)著として掲出。全二十八丁。	○わ37—1(半一)13(半影写一)、額原(版本写一)32刊)	○ゴジョウノヒヤック

<p>一6</p> <p>誹諧忍草</p> <p>大</p> <p>一</p> <p>清長(編)</p>	<p>37-5</p> <p>尾(自序) 尾 集</p> <p>大</p> <p>一</p> <p>鳥牧子 服部氏定(編)</p> <p>自序・(目付欠) 奥書・「萬治辛丑三月中旬」 立圃跋・(目付欠) 鵬鴿子跋(選)・「寛文三年 卯癸初夏望日」 洛下書堂・谷口三餘行</p> <p>注、絵入発句集。人丸以下三十六歌仙の画像と和歌を掲げ、本歌に因む編者の発句各一句を記す。「追加」として流味・三近ら三十六歌仙一卷を付す。全二十六丁。</p> <p>○わ37-11(大)―9(中)―10(中影写二)、竹冷七七一(大)―、富山(雷)・柿衛(各版一)</p>	<p>37-4</p> <p>埋(自序) 埋 草</p> <p>横五</p> <p>(二)五</p> <p>堺 安成(編)</p> <p>自序・「寛文元年辛丑水無月上旬」 刊・「寛文三年弥生吉辰」 京・谷岡七左衛門板行</p> <p>注、堺・大坂地方の俳人を中心とする四季類題別諸家発句集(卷一〜四)。句引によれば、句数「式千五百六十壹句、廿ヶ国」に及ぶ。第五冊に云也の独吟「落髮千句」(寛永十二年跋)を収録。卷(一)春五十丁、(二)夏卅七丁、(三)秋四十四丁、(四)冬・句引四十二丁、(五)落髮千句、堺云也独吟「四十九丁」。</p> <p>○酒竹二八七(横五)、宮城(選)(版五)、柿衛(版欠一、冬)、わ35-13(横欠一、秋)―12(半影写欠合二、卷一〜四)</p>	<p>37-3</p> <p>(誹諧) 誹諧むらさき</p> <p>大</p> <p>写一</p> <p>松翁軒 野々口立圃(著)</p> <p>自序・「千時寛文三年三月十一日、高橋常信文」 奥書・「千時天和三年亥正月吉日、高橋氏常信(花押)小山盛重文交魚写之」</p> <p>注、作法書。「発句之事」以下二十数条に分かつて説く。伝本(わたや文庫蔵)は、伝授を受けた常信が二十年後に盛重に贈ったものの交魚書写本。墨付十六丁。</p> <p>○わ60-2(大)―(大)―、(交魚筆)</p>
<p>ノブダサ</p>	<p>○ オバエシユウ</p>	<p>○ ウモレダサ</p>	<p>×</p>

37 — 8	37 — 7	37
俳諧茶杓竹 <small>千章正</small> 追加幅紗物句 (幅紗物序文) 千句茶酌竹 ふくさ物	破枕集 (自序・内題・尾題) 破枕集	
横四 (正・章・千・句)	中三 (天・地・人)	
	良保(編)	
茶杓竹自序・(日付・署名欠) 幅紗物自序・(日付・署名欠) 刊・「寛文三卯 歳八月吉辰」 京都・安田十兵衛	自序・「寛文三年癸五月中旬」	
注、俳諧論書。卷一(三(茶杓竹))は、貞室が貞徳の加判を得て公刊した『正章千句』(慶安1刊)に対する論難。卷四(副紗物)は、『玉海集』(明暦2刊)『紅梅千句』(明暦1刊)中の貞室の句に対する批言。無署名であるが、本書に対する反駁書『蠅打』(寛文4刊)に「榎梨氏一雪といふ新発意が茶杓竹と云書を作りて、彼千句等を難する事あり」とある。 (适)朝倉治彦校『貞門俳論集 上・下』(古今典文庫) (昭32刊) ○国会・東北大野・松宇(各版四)、わ37-6(横四、第三册影写)18(横欠二、正・句)17(横影写欠二、正・句)、学習院大(写欠二)	注、長頭丸以下京俳人を中心とする諸家の四季類題別発句集(天・地巻)。地冊巻末に句引を付す。合計数を欠くが、作者二百七十人、句数千三百九拾二句。最終冊(人巻)は付合作法書で、自序に「末には御傘の指合の大概を哥によみて一卷となす」とあるも、伝本未詳。天巻卅九丁、地巻三十丁。 ○酒竹三八六〇(中欠二、天・地)、学習院大(版欠一、地)、わ37-12(中影写欠一、地)、穎原(版本写欠一、地)	らに幸政ら十九氏の追悼句、および森景丸亭興行の連句一順(13句)迄を収録。全十四丁。 ○穎原(版本写一)、わ37-17(大ベン写一)
○ チャジャクダケ	○ ハチンシュウ	○ ハイシ ハイカイ

37—11	37 — 10	37 — 9
空 つ ふ て	俳諧 木玉集 (目録題・内題) 木玉集 (五・六卷、巻頭題) 木玉千句	早梅集 (序文) 早梅 (目録題・内題) 早梅集
大ニ (上・下)	中 六 (二一六)	横 六 (二一六)
立圃(著)	藤村氏何方子 倫員(編)	佗心子 梅盛(編)
自跋・二十時慶安二年五月吉辰 刊・「寛文三年」	奥・「寛文三曆 初冬廿日清書」 ・村上勘兵衛板行	内山一子序・「萬治三 稔庚子孟冬中旬」 (渡)阿・寛文三年十月
注、四季別自撰発句集。慶安二年初版の後刷再版本。 上卷三十八丁、下卷三十二丁。 (活)俳諧文庫18俳諧珍本集(明33刊)	注、京・撰津等の俳人を中心とする諸家の四季類題別発句集(巻一〜四)。巻末句引に合計数を欠くが、三百七十三人・二十八箇国。第五・六冊は、梅盛ら十二吟「木玉千句」、及び「試」「追加」として各八吟表八句を収載。奥書・板元名は、巻四・六兩巻末に重出する。(阿)広に「梅盛」撰とするが、春部に「倫員木玉集おもひたゞれける時の興行に」「同く清書の席にて」と前書する梅盛の句が見え、『詞林金玉集』(渡)故も「倫員」の編とする。巻(四)四十五丁、(三)三十二丁、半(四)四十五丁、(四)四十四丁、(四)四十二丁、(四)四十二丁。○わ3713(中六)・4(中欠一、巻三) 洒竹一〇三二(中欠四、巻一〜四)	注、二千有余の句数(序)を四季四巻に収めた類題別諸家発句集。(渡)阿(広)故に六冊とあるが、伝本、巻一春部(三十一丁)のみ。巻五・六は付句集か。序文に、「捨子集」「落穂集」の編集が延引中、亜相公の句を賜ったので急遽木集を編み、万治四年中に上梓する旨見え、『捨子集』(万治2序)の序にも「前集早梅のさがげにことゆづり」云々とあるが、暫く(渡)阿の年記に従って掲出する。 ○わ3715(横影写欠一、巻一)
ソラツブ テ	○ コダマシユウ	○ ソウバイシユウ

寛文四年(子辰・一六六四)

38-1	(跋文) みこのの舞	横一	友貞(著)	立圃跋・「寛文四年二月下旬」	注、立圃点友貞独吟十句。書名は、巻頭の発句と脇句による立圃の命名。天理本は原題簽を欠くが、(渡)阿(広)には「神子舞」と表記。全四十一丁。	ミコノマイ
------	---------------	----	-------	----------------	---	-------

37-12	貞徳俳諧記 (内題) 貞徳俳諧記	横二 (乾・坤)	服部一貞(編)	<p>椋梨柳風庵一雪序・(日付・署名欠)</p> <p>自跋・(日付・署名欠)</p> <p>洛陽書林・田中文内行</p>	<p>○京大(大二)、わ37-14(大影写二)</p> <p>注、連句・発句集。上巻は*貞徳・*西武・季吟・*重頼・一雪の各独吟百韻(*印は自注)五巻を、下巻は「諸国作者之系図」として有力俳人の住国別系譜と撰集名を挙げ、次いで元日・花・郭公・月・雪の季題別に諸家発句(二六四句)を収録。年記を欠くが、寛文三年以前の歳旦吟を所収すること、寛文四年八月刊『蠅打』(追加巻四)に本書の名を挙げ、寛文元年興行の一雪独吟百韻及び一雪の発句(41句)に批言を加えていることなどにより、寛文三年刊か。上巻三十一丁、下巻十九丁。</p> <p>(活)島本昌一著『貞門俳諧自註百韻―翻刻と研究―』(近世初期文芸研究会・昭43刊)、古典俳文学大系1貞門俳諧集一(昭45刊)</p> <p>(複)荻野秀峰解題『貞徳俳諧記』(近世文学資料類從・古俳諧編39V)(昭50刊)</p> <p>○聖心女子大(横合一)、わ37-15(横欠一、乾巻)16(横影写欠一、乾巻)</p>	○
				○ テイトクハイカイキ	○	

<p>38 — 4</p> <p>(自序) はなひ 大全 (内題) はなひ 草 大全</p> <p>横 三 (上・中・下)</p> <p>蝶番軒(編)</p> <p>自序・(自付・署名欠) 自奥・「寛文四甲辰年孟 春上旬」 刊・「寛文四年^{辰甲} 六月吉 日」 京・河野角之丞^{板前} 執筆・武藤氏</p> <p>注、俳諧作法書。立圃著『はなひ草』(寛永13)の増補改訂版。上巻五十丁、中巻六十丁、下巻四十二丁。他に寛文五年堺屋板がある。本書に『御傘』を以て更に増補した一文し屋三郎右衛門板『はなひ草綱目』(内題「はなひ草大全」)もあるが、刊年を欠く。</p> <p>○わ38—8 (横合一)、高野山^{特別院}(版一)</p> <p>○ハナヒグサタイゼン</p>	<p>38 — 3</p> <p>(序文・目録題・内題) 阿 波 手 集</p> <p>中 四 (春・冬)</p> <p>尾陽城下 吉田氏無能子 友次(編)</p> <p>東海防丘散人呆翁跋(漢) ・「甲辰蕤賓穀旦」 ・コレトキ 自跋・「催時ゆるくあや あるみつがひとつ の年卯の花のさけ る比」云々</p> <p>注、伊勢国を中心とする諸家の四季類題別発句集。書名は、尾張の古跡阿波手の森の菅公神祠に奉納の趣意による(序)。句引によれば、「句数合式千貳百貳句、作者合三百三拾八人」(国数十三箇国)。春六十丁、夏四十四丁、秋四十七丁、冬四十六丁。</p> <p>○藤園(中欠三、春・夏・冬)、わ38—1(中影写欠三、春・秋・冬)、頼原(中欠合一、秋・冬)、村野(版欠一、春)、酒竹一—三(中欠一、夏)</p> <p>○アワデシュウ</p>	<p>38 — 2</p> <p>(仮題) (東下り富士一見記)</p> <p>卷 写 一 (自 筆)</p> <p>玖也(著)</p> <p>注、紀行。奥州磐城の内藤侯を訪ねるため、宗因に同道して寛文四年二月十三日大坂発、同月廿八日品川に到着する迄の東海道下向日記。玖也の和歌狂歌21・発句22、西翁の発句2、藤枝の定勝の和歌1、および宗因との夢想連歌兩吟歌仙一卷所収。</p> <p>(送)岡田利兵衛「松山玖也・東下り富士一見記」(国語国文)「昭28・4」</p> <p>○柿衛(卷写一、自筆)</p> <p>×</p>	<p>○わ38—13 (横一)14 (横影写一)</p> <p>○</p>
--	---	--	---------------------------------------

38-7	38-6	38-5
<p>俳諧名所付合 (自序・内題)</p>	<p>繩打 (内題) 繩打茶杓竹難書_序 茶杓竹難書_{卷一} 幅紗物之難書_{卷三} 繩打追加_{卷四}</p>	<p>俳諧兩吟集</p>
横一	横五 (序・一・二・三・追加)	横二 (上・下)
洛陽 寸胸子重俊(著)	尾陽の住人(著)	季吟等(著)
自序・(日付・署名欠) 自奥・「寛文 _甲 辰稔仲秋下	自序・(日付・署名欠) 刊・「寛文四 _甲 辰年六月吉日」 京・和泉屋八郎兵衛開板	自序・(日付・署名欠) 刊・「寛文四年甲辰六月」 ・西村又左衛門板行
注、名所付合語辞典。「伊勢海」以下、いろは順に諸國の名所を示して、それぞれ付合語を列挙し、和歌を付記する。全五十丁。	注、俳諧論書。一雪の貞室難書「茶杓竹・追加幅紗物」(寛文3刊)に対する反駁書(第一〜四冊)。第五冊(追加巻四)では、一雪の独吟百韻一卷、及び「発句批言」として一九六句を挙げて、論難逆襲する。著者は匿名であるが、(阿)種(也)に「犬井(乾)氏貞恕重次」とする。第(一)冊十七丁、(二)冊四十四丁、(三)冊五十九丁、(四)冊四十七丁、(五)冊五十二丁。 ◇适朝倉治彦校『貞門俳論集上・下』(古典文庫) (昭32刊) ○わ38-15 (横五) 14 (横合二) 16 (横影写欠三、卷一〜三)、柿衛(版五)、国会(横欠四、第一〜四冊)、旧彰考(版欠四)、松宇(版欠三、第二・四・五冊)、京大(版欠二、卷二・五)、北大(版欠二、卷二・四)、酒竹二〇三五(横欠一、卷二)	注、季吟が諸家と巻いた兩吟連句集。上巻に暫酔・可全らと明暦二年〜寛文三年の間に興行の百韻九卷、下巻に周令との漢和・和漢百韻四卷及び山石との漢和歌仙一卷(年時欠)を収録。編者名を欠くが、自序に「幸に書堂にありけれハ板にえりて」云々とあり、板元(西村)編か。上巻四十二丁、下巻十八丁。 ○わ38-9 (横二) 10 (横欠一、上) 11 (横影写欠一、下)、国会(版二)、学習院大(版本写一)、柿衛(写二)
×	○ ハ エ ウ チ	○ リョウギンシユウ

<p>38 — 9</p> <p>落穂集</p> <p>(序題・序文・内題・跋題・跋文・句引題)</p>	<p>38 — 8</p> <p>佐夜中山集</p> <p>(目錄題・内題)</p> <p>佐夜中山集</p>
<p>中七</p> <p>(二七)</p>	<p>横六</p> <p>(只・本哥</p> <p>・諷翁狂言</p> <p>小哥舞・付</p> <p>句・梅菊鼻</p> <p>欠猿・名所)</p>
<p>高瀬侘心子</p> <p>梅盛(編)</p>	<p>本松江重頼(編)</p>
<p>京兆西村景泰序(撰)・</p> <p>〔寛文三年閏逢秋徐</p> <p>極壯月初吉〕</p> <p>吟嘯軒跋・「寛文三曆十</p> <p>月中旬」</p> <p>刊・「寛文甲辰極月吉日」</p> <p>・野田彌兵衛板粹</p>	<p>卷五自奥・「寛文四年九</p> <p>月廿六日」</p> <p>卷六自跋・「寛文四年六</p> <p>月上旬」</p>
<p>注、四季類題別諸家卷句集。句引によれば「句数四千九百餘、作者七百五十餘人」(因数四十三箇国)。卷(春)五十四丁、(夏)四十九丁、(秋)五十四丁、(冬)三十一丁、(秋)三十一丁、(冬)三十八丁、(秋)句引二十丁</p> <p>○わ38―12 (中七) 17 (中欠二、秋上・下) 13 (中影写欠三、夏・秋上・下)、頼原(写欠一)</p>	<p>注、本歌取を主とする諸家の発句(卷一―三)・付句(卷四)集。第五卷末句引によれば「発句式千九百三十、付句八百七十五」。卷五は、俳諧作法と俳諧で、式目歌「梅千世百首」「菊千世百首」を掲出、「鼻欠猿」と題する貞室批判の文章を付す。卷六は、いろは順に挙げる名所(約八百五十)の付合語集。主に廿一代集から採集したもので、後半では多くの場合本歌を付す。各卷内題、書名下に、卷(内題欠)、(本哥取) (諷之詞) (付句) (俳学之大概) (名所之付合、廿一代集詞書等)とある。(渡邊)故などは本書を七冊とするが、第七巻については未詳。(八十二丁、(六十三丁、(五十四丁、(八十二丁、(四十七丁、(九十三丁。</p> <p>(復)荻野秀峰解題「佐夜中山集上・下」△近世文学資料類従・古俳諧編7・8√(昭48刊)</p> <p>○国会(横六、卷二・三写本)、神宮(横欠五、卷一)四・六、わ38 15 (横影写六) 12 (横欠一、卷二) 18 (横欠一、卷六)、学習院大・頼原(各版本写六)、松宇(横欠二、卷二・三)、梶衛(横欠一、卷二)△二部√、荻野秀峰氏(横欠一、卷二)</p>
<p>○ オチボシユウ</p>	<p>○ サヨノナカヤマシユウ</p>